



藤園會第二年會

一世の英傑兒玉藤園將軍流焉薨去されて早くも二十四歳、昨年忌日の集會に於て結ばれた藤園會第二回は將軍生誕の日を下し去月二十五日午後五時から鐵道協會樓上に於て開催された。將軍が第三世臺灣總督として拓殖界の大恩人たるや言ふ迄もなく、此日の來會者は當主兒玉秀雄伯を始めとし

後藤新平伯、水野鍊太郎、石塚英藏、關屋宮内次官、長岡外史、大井成元、木越安綱、堀内文次郎、淺野總一郎、毛利元秀、藤原銀次郎、賀來佐賀太郎、杉山茂丸、朝比奈知泉、漆間眞學、伊藤金彌其他三十餘名、
（田中首相、中橋商相等欠席）

同六時食堂に入り、席上堀内中將幹事として挨拶を爲し夫より故大將の懷舊談が始まる。吉弘陸軍少將は大將の先考新九郎氏の事蹟から大將が中尉時代熊本籠城當時の手翰を携帶して展觀に供し、次に杉山茂丸氏が日露役出

征の際大きな茶釜を餞別として贈つたが非常に持運びに困つたことや今は凱旋釜として築地本願寺に保存されて居る事杯を語る。次で朝比奈知泉翁の知遇談が出て、後藤伯は大將一世一代の激怒と言ふことに就て例の廈門出兵事件の思出話がある。山縣内閣當時に起つた此事件に對する伊藤公の反對、古木外相の狼狽、兒玉伯の激怒、西郷内相の調停、後藤長官の東上、馬關からの車中西郷内相との懇談、優詔降下、總督留任等話は仲々盡きぬ。當時の内相秘書官水野鍊太郎氏一身上の辯明ありとて起ち、又當時の總督秘書官關屋次官も黙して居れず。又之に關して當時の役者とあつた杉山茂丸氏の樂屋話があり兒玉伯の挨拶をなす機會もなかつた位、話に花が咲き時の移つるも打忘れて同十時散會した。尚ほ次會は恰も議會中で出席者の不便ありとし來年から舊曆に依り四月二十五日に開催する事となつた。